



子どもの支援や教育に携わる人が感覚統合理論を 学ぶことによって受ける影響についての質的研究

村越雄二^{*1}, 山西葉子^{*2}, 織田靖史^{*3}
高木雅之^{*3}, 永吉美香^{*1}, 太田篤志^{*4}

^{*1} 発達支援ルーム AQUA

^{*2} 東京都立大学

^{*3} 県立広島大学

^{*4} 株式会社アニマシオン プレイジム

A Qualitative Study of the Impact of Studying Sensory Integration Theory
on Working with Children as a Profession

Yuji MURAKOSHI^{*1}, Yoko YAMANISHI^{*2}, Yasushi ORITA^{*3}
Masayuki TAKAGI^{*3}, Mika NAGAYOSHI^{*1}, Atsushi OTA^{*4}

^{*1} Development support room AQUA

^{*2} Tokyo Metropolitan University

^{*3} Prefectural University of Hiroshima

^{*4} PlayGym, Animacion Ltd.

子どもの支援や教育に携わる人が感覚統合理論を学ぶことによって受ける影響についての質的研究

村越雄二^{*1}，山西葉子^{*2}，織田靖史^{*3}
高木雅之^{*3}，永吉美香^{*1}，太田篤志^{*4}

要旨：本論文は、職業として子どもと関わる人にとって、感覚統合理論を学ぶことがどのように経験され、子どもとの関わりにどのような変化をもたらすかを知ることが目的として、2013年～2016年に日本感覚統合学会が主催した6回の入門講習会の受講者131名を対象にアンケート調査を実施し、回答内容をSCAT (Steps for Coding and Theorization) の手法を用いて質的に分析した。結果として77名から有効な回答が得られ、受講者は感覚統合理論についての知識獲得を通じて新たな子ども理解を経験していることが示された。また学んだ後の仕事の中で子どもに寄り添った関わりや意図的なアプローチが増え手応え感を得ている者がいる一方で、導入への障壁や疑念に直面している者がいることも示唆された。職業として子どもと関わる人が感覚統合理論を学ぶことが、子ども理解と関わりへの改善に資することが明らかになったと同時に、現場への応用における障壁への対策の必要性が示された。

Key Words：感覚統合、子ども理解、保育・教育・療育

はじめに

感覚統合理論は1960年代に作業療法士 J.Ayres によって体系化された感覚情報処理

2023年12月2日受付，2024年3月11日受理
A Qualitative Study of the Impact of Studying Sensory Integration Theory on Working with Children as a Profession

- * 1 発達支援ルーム AQUA
Development support room AQUA
- * 2 東京都立大学
Tokyo Metropolitan University
- * 3 県立広島大学
Prefectural University of Hiroshima
- * 4 株式会社アニマシオン プレイジム
PlayGym, Animacion Ltd.

過程についての理論であり¹⁾，本理論に基づく感覚統合療法は子どもに対する療育技法として世界中で活用されてきた。日本では1980年代から広まり²⁾，日本感覚統合学会は教育者や保育者など作業療法士以外の職種へも広く門戸を開いて感覚統合理論を学ぶ機会を提供してきた³⁾。2013年の障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の施行⁴⁾や、2016年の発達障害者支援法の改正⁵⁾を背景に、発達障害を有する子ども達を理解し支援する枠組みへのニーズがますます高まっている中、感覚統合理論について言及された一般向け書籍も複数出版されており、本理論に触

れる機会を多くの人を持っている。一方で、世界的な潮流の中では、感覚統合療法のエビデンスの不明確さが指摘され、効果研究に用いられた“感覚統合療法”が感覚統合療法たる条件に合致していたかが問い直され、その条件を再定義した上で効果研究が試みられる⁶⁾という転換点に立っている。

日本において感覚統合理論が広まり活用されてきた背景には、本理論に基づく感覚統合療法介入の子どもへの直接的な効果の有無とはまた別に、感覚統合理論の考え方に触れ、学ぶことが、子どもに関わる人々のニーズに何らかの形で応えてきた可能性があるが、この点の詳細については明らかになっていない。

本研究では、子どもの支援や教育に携わる人が感覚統合理論を学ぶことによって受ける影響について明らかにすることを目的とし、日本感覚統合学会が主催する入門講習会基礎コースの修了者を対象に調査を行った。

日本感覚統合学会講習会

2019年時の感覚統合学会ホームページによれば³⁾、感覚統合学会の講習会には、入門講習会、認定講習会、アドバンス講習会があり(図1)、認定講習会及びアドバンス講習会が、感覚統合療法の実践に必要な基礎知識、対象の理解と評価方法、治療的介入の方法の習得を目標としているのに対し、入門講習会では、感覚統合の概要の把握と、日常生活や保育・教育活動に感覚統合の考えを生かすことができるようになることを目標として設定している。

入門講習会は、さらに基礎コース(2～3日間)、体験コース(2日間)、実践コース(2～3日間)からなり、基礎コースの受講終了者が体験コースに進むことができる。基礎コースは、初めて感覚統合療法について学ぶ

人を対象とし、家庭での生活や施設や学校での医療・保育・教育活動等に感覚統合の考えを生かしてもらうことを目的としている。体験コースは、基礎コースで学んだことをもとに、感覚統合遊具の体験や遊びの分析演習、遊びプラン作成などの実習を行い、実践コースでは、ケースを担当し、行動観察評価、遊びプランの作成・実施を行う。

対象および方法

1. 対象

2013年12月～2016年1月の間に日本感覚統合学会主催により全国4箇所で実施された6回の入門講習会(体験コース)の参加者を対象とした。除外基準は(1)同意が得られなかった人(2)職業上での子ども支援や教育(以下、臨床実践)に携わっていない人とした。

2. 方法

体験コース参加者全員に対して、文書及び

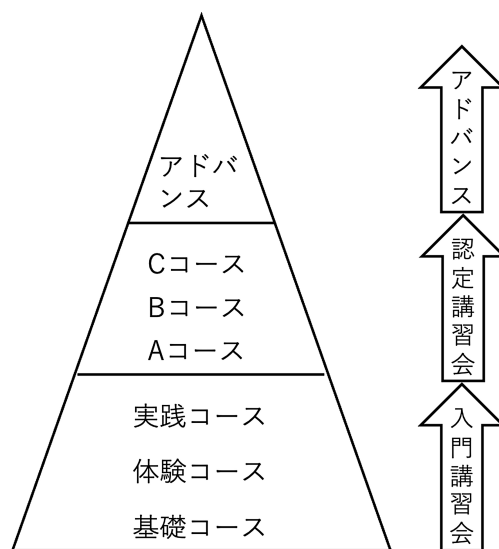


図1：日本感覚統合学会講習会
(ホームページ参照,筆者作成)

口頭にて研究趣旨及び倫理事項について説明を行い、研究協力に同意する場合は同意書への署名を求めた。

研究デザインは自己記入式質問紙調査の質的研究で、基礎コース受講から受けた影響を把握する目的で、「基礎コースで学んだこと」「基礎コースを受講して支援実践において役立ったこと」「基礎コースを受講して実践にいかすことが難しかったこと」の質問に対し、自由記載での回答を求めた。また回答者の職種、所属、現在の仕事に関する経験年数についても情報収集を行った。

アンケートの自由記述回答は、大谷⁷⁾の開発した SCAT (Steps for Coding and Theorization) の手続きにより分析した。SCAT は明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法であり、アンケート調査の分析にも使用可能であることから採用した。大谷⁸⁾によれば

SCAT は、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに<1>データの中の注目すべき語句、<2>それを言いかえるためのテキスト外の語句、<3>それを説明するようなテキスト外の概念、<4>そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きをとる分析手法である。

今回は筆頭著者がアンケートの自由記載部分をセグメント化し、共同研究者間で協議しながら脱文脈化のステップを進め、ストーリーラインと理論記述を作成した。図2に分析過程の例を示す。

結果

1. 回答者と属性

対象者 131 名中 77 名 (58.8%) から同意が

テキスト	<1>データの中の注目すべき語句	<2>それを言いかえるためのテキスト外の語句	<3>それを説明するようなテキスト外の概念	<4>そこから浮かび上がるテーマ・構成概念	<5>疑問・課題
高いところからジャンプする子や動き回る子に対して、「感覚探求をしている」と思って危険のない程度に、優しい気持ちで見守ることができるようになった。	高いところからジャンプ/動き回る/感覚探求/危険のない程度/やさしい気持ちで見守る	リスクの高い遊び/多動/感覚運動欲求/安全確認して禁止しない/寄り添った対応	遊び行動から感覚特性を分析/重要性の理解と許容/対処行動の変化	【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもへの子どもに寄り添った関わりの増加】	子どもに寄り添った関わりのデメリットは？
日々の保育の活動にサーキットを取り入れたり、日々の生活の中でポイント的に入れることで、子どもたちの反応が良く、自分たちの方から何度も繰り返して遊ぶ様子が見られた。	日々の保育/サーキット/日々の生活/ポイント的に入れる/子どもたちの反応が良く/自分たちの方から何度も繰り返して遊ぶ	いつもの保育活動/組み合わせの運動活動/短時間の導入/日常的な取り組み/子どもの好反応/能動的/適応反応	感覚運動遊び/いつもの遊びにプラス/能動的な遊び/遊びへの没入	【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】	遊びと理論が切り離されないか？
単に楽しく一緒に遊ぶということではなく、変化するための要素から、組み立てることが大切だということを頭においている。	単に楽しく遊ぶということではなく/変化するための要素/組み立てる	目的のある遊び/ボトムアップ/行動につながる感覚/遊びの構成	行動変化を狙った遊びの構成と提供	【知識を元にした意図的なアプローチの試み】	恣意的な遊びに繋がるか？
ストーリーライン	受講者は、【感覚と行動と遊びの関連についての理論的学び】に加え、【個々の感覚の差についての納得】をすることで【子ども理解の新たな切り口の獲得】が起こる。同時に【具体的な遊びメニューの入手獲得】も経験する。受講者には【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもや保護者への子どもに寄り添った関わりの増加】が起こる。【知識を元にした意図的なアプローチの試み】を行い【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】を得る一方で、【対象者にマッチさせる難しさや支援のアイディアの乏しさ】にも直面する。受講者によっては【時間と労力の不足】や【職場の物理的環境による実施の制約】、【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】を【実践に取り入れる障壁】として経験し、時に【対象者ニーズの解決への疑問】も抱く。				
理論記述	【感覚と行動と遊びの関連についての理論的学び】と【個々の感覚の差についての納得】が【子ども理解の新たな切り口の獲得】につながる。/受講生は【具体的な遊びメニューの入手】を経験する。/受講者には、【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもや保護者への子どもに寄り添った関わりの増加】が起こる。/【知識を元にした意図的なアプローチの試み】をした結果、【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】を実感するが【対象者にマッチさせる難しさや支援のアイディアの乏しさ】もある。/【時間と労力の不足】や【職場の物理的環境による実施の制約】、【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】が【実践に取り入れる障壁】となり【対象者ニーズの解決への疑問】を持つことがある。				

図2：SCAT を用いた分析の一部

得られ、除外基準（2）に該当する者はいなかった。職種は作業療法士が43%、保育士22%であった（図3）。所属先は児童発達支援事業所・児童発達支援センターに所属する

人が最も多く（図4）、経験年数は3年未満が35%、4～9年が31%、10年以上が33%とまちまちであった。基礎コース受講からの経過年数は3年未満が78%を占めていた。

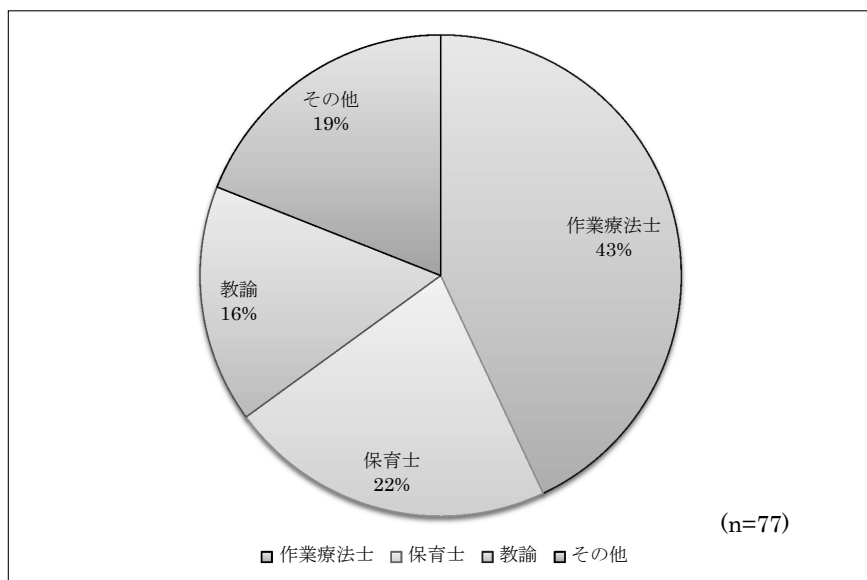


図3：回答者職種

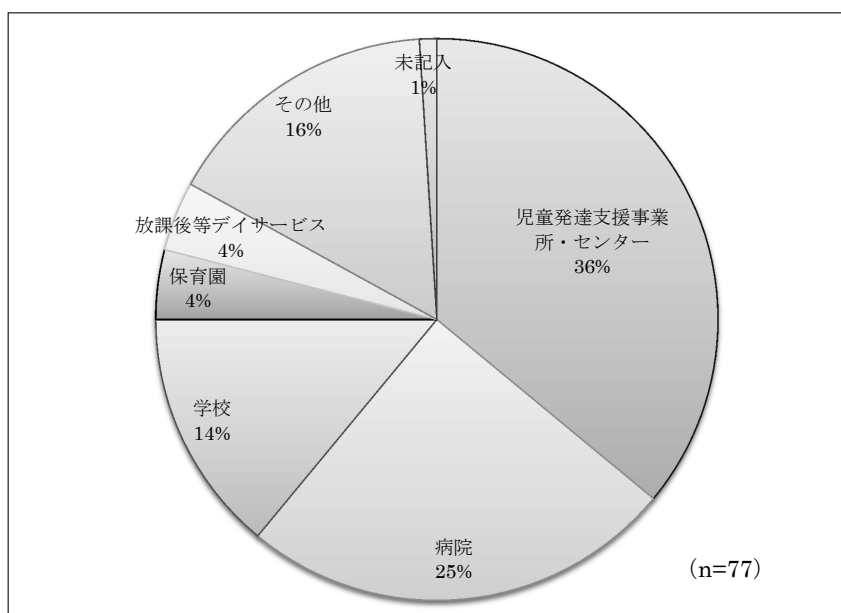


図4：回答者所属先

2. ストーリーラインと理論記述

自由記述回答の内容を SCAT にて分析したところ、表1に示すストーリーラインと理論記述が得られた。ストーリーライン及び理論記述に用いたテーマ・構成概念は【】で示し、得られた理論記述には便宜上、数字を付すことにした。

考察

1. 理論記述①について

結果から受講生が【感覚と行動と遊びの関連についての理論的学び】を得ていることがわかった。感覚統合は“人間が自分の身体や環境からの感覚情報を整える神経学的過程であり、環境の中で自分の身体を有効に使うの

を可能にすることである”⁹⁾とされている。“感覚が脳に与える影響、その伝わり方により、表出に違いが出てくることを学んだ。”と受講生が記しているように、感覚情報の取得から処理、運動表出に至るプロセスと、感覚情報とその処理が行動に影響を与える可能性についての知識習得が行われたと考えられる。

また“前庭覚・固有受容覚・触覚、それぞれの感覚について学び、遊びの場面とどのように関連づいているのかを学んだ。”等の記載に見られるように感覚と行動だけではなく、感覚と遊びとの関連についての理解を受講生が得ていることが示唆された。Bundyが“遊びは強力な治療手段である。(多くの

表1：ストーリーラインと理論記述

ストーリー ライン	受講者は、【感覚と行動と遊びの関連についての理論的学び】に加え、【個々の感覚の差についての納得】をすることで【子ども理解の新たな切り口の獲得】が起こる。同時に【具体的な遊びメニューの入手】も経験する。 受講者には【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもや保護者への子どもに寄り添った関わりの増加】が起こる。 【知識を元にした意図的なアプローチの試み】を行い【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】を得る一方で、【対象者にマッチさせる難しさと支援のアイディアの乏しさ】にも直面する。 受講者によっては【時間と労力の不足】や【職場の物理的環境による実施の制約】、【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】を【実践に取り入れる障壁】として経験し、時に【対象者ニーズの解決への疑念】も抱く。
理論記述	①【感覚と行動と遊びの関連についての理論的学び】と【個々の感覚の差についての納得】が【子ども理解の新たな切り口の獲得】につながる。 ②受講生は【具体的な遊びメニューの入手】を経験する。 ③受講者には、【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもや保護者への子どもに寄り添った関わりの増加】が起こる。 ④【知識を元にした意図的なアプローチの試み】をした結果、【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】を実感するが【対象者にマッチさせる難しさと支援のアイディアの乏しさ】もある。 ⑤【時間と労力の不足】や【職場の物理的環境による実施の制約】、【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】が【実践に取り入れる障壁】となり【対象者ニーズの解決への疑念】を持つことがある。

クライアントにとって作業療法の最も重要な副産物は遊びの能力の改善にあるかもしれない。) ”¹⁰⁾と述べているように、遊びは感覚統合において治療手段であり改善の成果物とみなされている重要なものである。回答者の6割が作業療法士または保育士であり、日常の業務の中で常に子どもと遊んでいるため、遊びの中で子どもが豊富な感覚刺激を受け取っていることや、遊びが子どもにとって重要な作業であり遊びの中で成長していることも直感的に認識している可能性が高い。他方で、遊びは治療や改善といった概念とは一般的に結びつきにくいいため、感覚統合理論を学ぶことが受講生に遊びの意義を見直し価値を再発見する根拠と機会を提供した可能性がある。

感覚は個人差が大きく感覚情報を処理して得られる認知世界も個々に異なる。感覚統合理論の入門講習会では理論学習と並行して体験学習が取り入れられているため、“自分の感覚を改めて振り返り、個々に違うことを理解できた。”というデータにみられるように、同じ状況下での個々の感覚の違いや、行動や情動といった反応の違いについて【個々の感覚の差についての納得】が得やすく、了解し難く感じていた子どもの行動を共感的に理解するベースとなったと思われる。先述の理論的理解と体感的共感が相まって【子ども理解の新たな切り口の獲得】につながっていると考えられる。

【子ども理解の新たな切り口の獲得】に該当する記述はどの職種の回答者からにも見られ、保育、教育、医学などにおける一般的な行動解釈とは異なる部分を感覚統合理論が補完できる可能性が考えられる。“なぜ子どもがこのような動きをするのか?”という一つ一つの疑問がつながりを持っていて、理由があることを知り、ショックを受けた。目からウロコだった。”とのデータに見られるよう

に、情動を伴う学びの経験を報告した回答者もいた。情動は学習を促進と言われており¹¹⁾ 感覚統合理論を学習する際に、情動体験を伴って【子ども理解の新たな切り口の獲得】をしていることが、研修を終えてからの日常業務の中でも学習した視点を維持することに貢献している可能性がある。

このように、感覚統合理論は、職業として子どもに関わる人が一般的に有している知識とはまた異なる切り口から子どもについての仮説を提供しており、感覚統合理論の初学者の子ども観に、枠組みの変容を起こした可能性がある。

2. 理論記述②について

受講生は、役立ったことを問う質問に対して“支援グッズの紹介。すぐに使える遊び方の紹介”と回答するなど【具体的な遊びメニューの入手】をできたと感じていることがわかった。すぐに仕事に導入できる具体的な方略は、受講生のニーズに即応するものであったと推察される。一方で、子どもの行動背景を分析し応用する支援者側の理解やスキルが不十分な状態で、グッズやメニューを導入して思ったような結果が得られなかった場合、理論自体に対する疑念に繋がる可能性もあり、さらに検証が必要な点である。

3. 理論記述③について

“今までは心理面や情動面をベースにしたが、(中略)、感覚統合という視点を持つことで、行動に対する理解、気づきの幅が広がった。”“高いところからジャンプする子や動き回る子に対して、「感覚探求をしている」と思って危険のない程度に、優しい気持ちで見守ることができるようになった。”等の記述に見られるように、【子ども理解の新たな切り口の獲得】をした受講生には【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもに寄り添った関わりの増加】が起こっている。これ

は感覚統合理論が学習者に起こす変化の中でも重要なポイントであると考えられる。

子どもの不適切な行動は大人の怒りを喚起させると同時に、子どもの行動を制御しなければという使命感にも似た心情に大人を駆り立てる。日本の教師の感情労働に関する研究¹²⁾では、教師は怒りや好意といった感情を状況に応じてコントロールすることで、関係づくりやしつけを実施しており、熟練した教師は子どもに対する認知の枠組みを変えることによって感情管理を行っていることが指摘されている。今回の調査結果は、感覚統合理論をが、子どもに関わる仕事をする人の職業上の感情コントロールに貢献しうる可能性を示唆していると考えられる。

また、保育士、教師、療法師等は、対象児にとって人的環境の一部であると同時に、保護者等の子どもにとって近い大人の関わり方にも影響を与える存在でもある。【行動の分析力の向上と視野の拡大による子どもに寄り添った関わりの増加】には、「「意欲」「怠惰」と考える先生にSI (Sensory Integration) の視点から説明し「精一杯頑張ろうとしている姿なんだ」ということを伝えることができた」等の子どもにとって近い大人に対する助言等も含まれていた。発達障害児において、周囲の不適切な関わりによる二次障害が思春期以降深刻な事態を引き起こすことが以前より指摘されており¹³⁾、二次障害を早期から予防する目的において、感覚統合理論が子どもに大きなメリットをもたらしうると考える。

4. 理論記述④について

“刺激の量や程度を調整して、覚醒の程度をかえることを頭においてやっている。” “子どもを見て、どんな刺激を苦手とするのか、どこの部分にアプローチしたら伸びるのか考えられるようになってきた”などのデータか

らは、感覚統合理論の学習が、子どもの行動の分析や考察、より質の高い活動を試行錯誤する契機となり、【知識を元にした意図的なアプローチの試み】を実行したことが示された。さらに“子どもたちの反応が良く、自分たちの方から何度も繰り返して遊ぶ様子が見られた。” “感覚探求の子に感覚を与えることで、落ち着かせる、集中力を高めることができた。”等の記述に見られるような【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】に繋がっていることも示唆された。これらは今まで受講生が臨床実践上うまくいかないと感じていたことについて、感覚統合理論を学んだことを契機に打破できた可能性を示していると考えられる。保育士に関する先行研究では、保育者効力感は職務内容満足度に有意な影響を及ぼし、職務内容満足度が保育士の精神的健康に有意な影響を及ぼすとされており¹⁴⁾ 【感覚運動遊びの導入と子どもの変化の手応え】は、受講者の精神的健康にもプラスの影響を及ぼした可能性がある。このような成功体験は受講生の仕事との結びつきを高め、学んだ視点を生かした工夫をしてみようという行動を強化していくものと考えられる。

一方で、“理論は学んだが、活動や子どもの変化・状態と結びつけることが難しい。” “仕事の対象者の半分には適していたが、残り半分は高学年・高機能のため、いかに応用するかが課題だと思った” “具体的にどういう活動をしたらいいのかがなかなか考え付かない。”等、【対象者にマッチさせる難しさと支援のアイディアの乏しさ】について述べた受講生もいた。たとえ理論に納得したとしても、分析や実践にまで繋げることは容易でなく、思うように運用できないことがもどかしさや挫折感の種となりうることを表していると考えられる。

5. 理論記述⑤について

感覚統合理論を【実践に取り入れる障壁】として、【時間と労力の不足】や【職場の物理的環境による実施の制約】、【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】が存在することが結果から示された。“日々の雑務に追われ、なかなか準備が進まない。情報量が新しいことばかり、かつ多すぎて実践にまで力が及ばなかった。”等の【時間と労力の不足】に関する記述からは、受講生の日常業務に新しいことを組み込む時間的精神的余裕がないことと同時に、感覚統合理論を実践に導入するには、手間とエネルギーが必要だと受講生に認識されたことも窺える。“スペース的に粗大運動ができないので、代わりになるような活動を見つけるのが難しかった。”等の【職場の物理的環境による実施の制約】や、“「この子だけ使わせるのは目立つ」という理由で担任から受け入れてもらえず、継続できないというケースが多い”“FB(フィードバック)してくれる先輩や指導者がいないため(実践しにくい).”という記述に代表されるような【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】の内容からは、適用対象者、場や器具なども含めて、感覚統合理論が特殊な理論と受け取られ、ハードルの高さを感じさせる側面があることを示唆していると考えられる。

特に【導入時に他者の理解を得ることの困難と孤立】は受講生の職場が学校である場合に多く見受けられた。澤田¹⁵⁾は戦後日本においては、「能力主義的-差別教育」観と発達保障論という2つの異なる教育思想が両立してきたことを「能力観のダブルスタンダード」とであると指摘しているが、個人の発達保障に重点を置く感覚統合理論を保育や教育現場で応用していくには、このダブルスタンダードについてのより深い考察が必要となると思われる。

以上のような【実践に取り入れる障壁】をクリアする目的では、日本感覚統合学会が開催する実践コースや認定コースなど学びを高めるコースが設置されているが、臨床上の疑問や課題をもっと気軽に相談しアイデアを交換しあう機会を地域内で設けたり、近隣のインストラクター等がサポートする体制を整えたり、初学者用のコースを繰り返し気軽に受講できるようにするなど、受講生のニーズに適切に応える方法を検討していく必要がある。この方策の一つとして、感覚統合理論の普及において、専門的な技術により成果を生み出す感覚統合療法セラピストを育成することと、感覚統合理論の視点に立った子ども理解の提供や生活や教育・支援の中で本理論を活かす試みを、ある程度区別しつつ、より各々の目的に即する形で発展させていくことが考えられる。ただし、クリニックベースの感覚統合療法に比べて、教室ベースで行われた単一感覚に着目した取り組み(重錘ベストやバランスボールの導入など)はプロトコルやターゲットとした感覚処理の問題が適切でなく成果を示せていないと言う指摘¹⁶⁾もあり、感覚統合理論を生かしたより一般的な取り組みが、適切に実施されるにはどのような学びが必要かについてはさらに議論を重ねる必要があると考える。

記述回答の中には“母親の希望や困ったことを解決できない”“効果的かどうか不安”等、【対象者ニーズの解決への疑念】を覚えた受講生の存在を示すものもあった。感覚統合理論が保護者の抱えるニーズを全て解決するとは限らないし、理論記述②に示したような【具体的な遊びメニュー獲得】のみを行い十分な理論の理解が得られていない場合にもニーズ解決へと結びつかない可能性も考えられる。【対象者ニーズの解決への疑念】を払拭するには、効果がみられた事例の紹介や、保護者

から上がりやすいニーズに対する解釈や対処の共有等、講義内容の工夫と同時に、感覚統合療法介入のエビデンスを確立し理論を裏付けるメカニズムの解明を急ぐ必要があると考える。

研究の限界

今回は、基礎講習会の次のステップにあたる入門講習会受講者に対してアンケートを行っているため、肯定的な意見が集まりやすかった可能性が高い。今後は否定的な意見を収集し分析する取り組みも必要と考える。また、受講時に学んだことに関するデータについては、受講直後のデータではないため、時間経過による影響があった可能性がある。

まとめ

今回の調査により、感覚統合理論を学ぶことは、受講生自身の子どもの行動に対する了解不能という思いを解消し、子どもの見方をポジティブに変え、実際の子どもとの関わりを変化させ、仕事の中で手応えを感じさせるといった影響を与える可能性があることが示唆された。このことから、子どもに関わる様々な人々に対し、感覚統合理論を伝えることは一定の意義があると言える。一方で、臨床実践において積極的に活用するには障壁も多く、受講生が戸惑いや疑問を感じることも示された。これらの点の改善のためには、講義内容の工夫や継続的なサポートを含む学びのシステムの構築を実行し、エビデンスを蓄積していくことが重要である。

文献

- 1) Ayres Sensory Integration. *Sensory Integration Global Network*.
<https://www.siglobalnetwork.org> (参照 2024-01-31).
- 2) 加藤寿宏, 松島佳苗: 感覚統合療法, OT ジャーナル, 52 (8): 846-851, 2018.
- 3) 日本感覚統合療法学会.
<http://www.si-japan.net> (参照 2019-05-18).
- 4) 内閣府. 障害を理由とする差別の解消に関する法律.
https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law_h25-65.html (参照 2024-01-31).
- 5) 厚生労働省. 発達障害者支援法の改正について.
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000128829.pdf (参照 2024-01-18).
- 6) Parham, L.D., Roley, S.S., May-Benson, T.A., Koomar, J., Brett-Green, B., Burke, J.P., Cohn, E. S., Mailloux, Z., Miller, L. J., Schaaf, R.C.: Development of a Fidelity Measure for Research on the Effectiveness of the Ayres Sensory Integration Intervention. *Am J Occup Ther.*, 65 (2): 133-142, 2011.
- 7) 大谷尚: SCAT: Steps for Coding and Theorization, 感性工学. 10 (3): 155-160, 2011.
- 8) 大谷尚: 質的研究の考え方, 名古屋大学出版会, 271, 2019.
- 9) 岩永竜一郎: 感覚統合療法, 作業療法ジャーナル, 47 (7): 666-670, 2013.
- 10) Bundy, A.C., Murray, E.A., Lane, S. J. (土田玲子, 小西 紀一監訳): 感覚統合とその実践 第2版, 共同医書出版, 245, 2006.
- 11) Watanabe N., Sakagami M., & Haruno M.: Reward prediction error signal

enhanced by striatum-amygdala interaction explains the acceleration of probabilistic reward learning by emotion. *The Journal of Neuroscience*, 33(10) : 4487-4493, 2013.

- 12) 伊佐夏実：教師ストラテジーとしての感情労働，*教育社会学研究*，84 : 125-144, 2009.
- 13) 木谷秀勝：発達障害のある子の自己理解：二次障害を防ぐ，*児童心理*，72 (5) : 442-446, 2018.
- 14) 前田直樹，金丸靖代，畑田惣一郎：保育者効力感，社会的スキル及び職務満足

感が保育士の精神的健康に与える影響，*Journal of Kyushu university of Health and Welfare*，10 : 17-23, 2009.

- 15) 澤田誠二：教育における日本的平等観再考－障害児教育をめぐる運動言説の社会的分析をてがかりに－，*東京大学大学院教育学研究科紀要*，49 : 43-53, 2010.
- 16) Case-Smith, J., Weaver, L.L., Fristad, M.A. : A systematic review of sensory processing interventions for children with autism spectrum disorders. *Autism*, 9 (2) : 133-148, 2015.

A Qualitative Study of the Impact of Studying Sensory Integration Theory on Working with Children as a Profession

By

Yuji MURAKOSHI ^{*1}, Yoko YAMANISHI ^{*2}, Yasushi ORITA ^{*3}
Masayuki TAKAGI ^{*3}, Mika NAGAYOSHI ^{*1}, Atsushi OTA ^{*4}

From

^{*1} Development support room AQUA

^{*2} Tokyo Metropolitan University

^{*3} Prefectural University of Hiroshima

^{*4} PlayGym, Animacion Ltd.

The purpose of this paper is to understand how learning sensory integration theory is experienced by those who work with children as a profession and how it changes their interactions with children.

A questionnaire survey was administered to participants of four introductory workshops organized by the Japanese Society for Sensory Integration between 2013 and 2016 (N=131), and the responses were analyzed qualitatively using the Steps for Coding and Theorization (SCAT) method. We got 77 valid answers. The results showed that participants experienced a new understanding of children through their knowledge of sensory integration theory. In clinical situations after learning the theory, some practitioners experienced increased empathic involvement and a sense of responsiveness in their work, while others faced barriers, and doubt in implementing the theory. While it was clear that learning sensory integration theory can help practitioners improve their understanding of and interactions with children, it also indicated the need to address barriers to its application in the field.

Key words: Sensory Integration, Understanding children's behavior, Education and nursing